



〈2024年11月1日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

若月^{れい}滯子 著



『「副業おじさん」の実態』感想文

若松 裕次郎



「人生100年時代」ということばがありますが、48歳となった今、「後半の人生を自分らしく生きるには、どうすればいいのか」と考えることが増えてきたように思います。また、その具体的な準備として「副業」に関心を持つようになりました。副業は未経験ですが、資格の取得に取り組んでいたりしています。

「図書室のつどい」は以前、「ウンコの教室」という回に参加し、目からうろこの連続で、大変面白かったこともあり、何か興味のあるテーマがあれば参加したいと思っていました。今回、「副業おじさん」というタイトルに惹かれ、「副業の実態を知るいい機会になるかもしれない」「自分も新たな一歩を踏み出すきっかけになるかもしれない」という期待で、参加いたしました。

講演の中で、何人もの「副業おじさん」をご紹介いただき、それぞれに異なった背景や理由があり、面白く聴いておりましたが、その中で特に印象に残っているのは、あるデザイナーの方のお話でした。その方はもともと教師になる夢があり、副業として、障がいを抱えているお子さ

私たちの学習支援をしていました。「副業」で夢を実現されているという点もいいなと思いましたが、話の中で、子どもたちから頼まれ、マンガのキャラクターを描いてあげたところ、子どもたちが目をきらきらさせながらすごく喜んでくれて、それがその方の心も大変満ちたというお話を聞き、そのような関わり方もとても素敵で、副業の一つの理想形だとも思いました。

普段は、どうしても日々のことで忙しく、好きなことややりたかったことから離れてしまったり、大きな企業で働いていたりすると、直接感謝し、されるということ自体が少ないかと思えます。

今回の講演を聴き、改めて今後の生き方、働き方を考える際に、何を大切にしていきたいのかを考えるヒントをいくつもいただいたと思います。

自分の好きなこと、やりたかったこと、自分が心地よいと感じる生き方、など自分らしく生きていくために大切にしたいものをしつかりと持って、「副業」や後半の人生に向き合っていきたいと思いました。

この記事は主に国立市とその周辺に住まわれている方が読まれていると思いますが、「図書室のつどい」をもし知らない、参加したことがないという方に、私は自信をもって参加されることをお勧めします。自身の興味のあるテーマに関して、身近な場所でも、テーマに関する本の著者から直接お話を聞き、また対話ができる場があるというのはとても恵まれていると思います。また、この場を通して、もしかしたら、今後の人生を変えてしまうような素敵な出会いがあるかもしれません。こうした取り組みを長年継続されている方々には敬意しかありませんが、これだと思ふタイトルを見つけたら、参加してみてもいいでしょうか。きつと素敵な出会いがあるかと思えます。また、関心がある方と一緒に参加されるのも、その後のお話もでき、楽しい経験になるかと思えます。私自身もまた興味のあるテーマの回には、参加しようと思います。

(朝日新聞出版)



ブッククラブから

馳星周著 『少年と犬』 を読んで

北原 久嗣

1月9日に開催された「くにたちブッククラブ」の課題図書は、第163回直木賞受賞作、馳星周著『少年と犬』(文春文庫)でした。

文庫版『少年と犬』は7つの短篇(「男と犬」「泥棒と犬」「夫婦と犬」「少女と犬」「娼婦と犬」「老人と犬」「少年と犬」)で構成される連作短篇集です。犬と出会い、ともに過ごし、別れを告げる。それだけのことなのですが、その短い時間のなかで起きる、登場人物の内面的変化とその変化を促す犬の役割が、様々な情景とともに描き出されます。

その犬は、シェパードと和犬の雑種の特徴をもち、その漆黒の瞳は言葉を介さずとも人の心に働きかけます。その犬の名前は多くを聞くと書いて「多聞」、生まれた時の顔が、毘沙門天に似ていたが「毘沙門」では何だからということで毘沙門天の別名「多聞天」から「多聞」と名付けられたことが、「少年と犬」で明かされます。

多聞との出会いはある日突然訪れます。各短篇の冒

頭、深い悲しみと大変な困難を抱えている登場人物の前に、ガリガリに痩せた姿で多聞は現れます。彼らは、そのような多聞を放っておくことができず、歩み寄り、声をかけ、抱き上げ、助けます。

多聞と過ごす生活が始まりますが、登場人物を取り巻く困難な状況に変わりはありません。そのようななか、登場人物の内面に変化が現れます。「少女と犬」では、事故で両親と右脚を失った瑠衣の心が凍りついてしまうような時、多聞が瑠衣に体を押し付けてくる場面が描かれます。多聞の体温とともに鼓動を感じた瑠衣は、多聞の鼓動から「大丈夫、大丈夫、瑠衣は大丈夫」と励まされます。

多聞は言葉を話すことはありませんが、登場人物は多聞に話さずにはいられません。「娼婦と犬」では、追い詰められ震える美羽の頬を多聞が舐める場面が描かれます。多聞の温かさが震えを止める。多聞の優しさが胸に突き刺さる。美羽は多聞に「あんたたちの魔法って、人を笑顔にするだけじゃないんだね。そばにいて、人に勇気と愛をくれるんだ」と語りかけます。

登場人物にとって多聞は「神様からの贈り物」なのです。困難な状況はそのままでも、その困難に向き合う心の有り様は、寄り添う多聞の励ましによって回復し力を得ているのです。しかし、多聞との時間も終わりを告げます。多聞には大切な使命が与えられており、そのことを悟った彼らは、多聞を送り出します。たとえ多聞との別れがどのような形をとろうとも、多聞の励ましは彼らの心の内にあり続けるのです。

ブッククラブ後半の講師解説では、大野亮司先生が、7つの短篇の時間の流れとその整合性について言及されました。そのなかで、参加者のお一人が、『少年と犬』は発刊当時「少女と犬」の一篇を含んでいなかったが、その一篇を除くと時間の流れは整合すると指摘されました。なぜその位置に挿入されたのかも含め様々な読み方ができると思いますが、文庫版『少年と犬』の7つの短篇、私は目次の順番に読むことをお勧めしたいと思います。

(文春文庫)



新着図書から

〈総記〉

AIは「月が綺麗ですね」を理解できるか？

岡本裕一朗 (SBクリエイティブ)

007

〈哲学 心理学 宗教〉

戦場のカント

石川求 (筑摩書房)

134

〈歴史〉

講義 宗教の「戦争」論

鈴木董 (山川出版社)

209

平安時代の男の日記

倉本一宏 (KADOKAWA)

210

検証 学徒出陣

西山伸 (吉川弘文館)

210

朝鮮民衆の社会史

趙景達 (岩波書店)

221

ウイーン1938年最後の日々

高橋義彦 (慶應義塾大学出版会)

234

ウクライナ全史 上・下セルヒー・プロヒー (明石書店)

238

雄鶏の家 ウクライナのある家族の回想録

ヴィクトリア・ベリム (白水社)

289

〈社会科学〉

新版 地図で見るイスラエルハンドブック

フレデリック・アンセル (原書房)

302

トランプ再熱狂の正体

辻浩平 (新潮社)

302

なぜガザなのか

サラ・ロイ (青土社)

302

被爆者から「明日の語り手」へ 赤旗編集局 (新日本出版社)

319

戦争ではなく平和の準備を

川崎哲 (地平社)

319

さすがに日本は、戦争なんてしてはいけませんよね!?

西谷修 (東京新聞)

319

レイディ・ジャステイス ダリア・リスウィック (勁草書房)

327

「社会」の底には何があるか

菊谷和宏 (講談社)

361

男はクズと言ったら性差別になるのか

アリアン・シヤフヴィシ (柏書房)

361

挑戦するフェミニズム 上野千鶴子 (有斐閣)

367

有害な男性のふるまい デヴィッド・M・バス (草思社)

367

政治分野におけるジェンダー平等の推進 富士谷あつ子 (明石書店)

367

「コーダ」のぼくが見る世界 五十嵐大 (紀伊國屋書店)

368

バザールカフェ 狭間明日実 (学芸出版社)

369

介護格差 結城康博 (岩波書店)

369

新自由主義教育の40年 児美川孝一郎 (青土社)

372

食べ物でたどる世界史 トム・スタンデージ (楽工社)

383

〈自然科学〉

優生保護法の時代を生きる

岡田靖雄 (六花出版)

498

〈工業〉

核安全性の限界

スコット・セーガン (藤原書店)

539

〈芸術〉

戦争映画を解説せよ!

永田喜嗣 (青弓社)

778

〈文学〉

「アイドルの国」の性暴力 増補版 内藤千珠子 (新曜社)

910

迷惑な終活 内館牧子 (講談社)

91う

雷と走る 千早茜 (河出書房新社)

91ち

がっこうはじごく 堀静香 (百万年書房)

91ほ

パイパイのある街 台湾日本語文学アンソロジー

山口守 (皓星社)

91や

柚木沙弥郎旅の手帖 柚木沙弥郎 (平凡社)

91ゆ

二階のいい人 陳思宏 (早川書房)

92チ

料理からたどるアガサ・クリステイ

カレン・ピアース (原書房)

930

戦争は女の顔をしていない1〜5

小梅けいと (KADOKAWA)

98こ

図書室のしず

『わたしの農継ぎ』

お話 高橋 久美子 (作家・詩人・作詞家)

著者の高橋さんは愛媛県で生まれ育ち、現在は東京で創作活動に取り組み一方で、愛媛では仲間たちとともに地域の風景や先人の知恵、種を受け継ぐための農業を模索しています。高橋さんは、「職は別々に持ち、自給自足+αを目指して活動する農家もついてもいいはずだ」とおっしゃいます。

今回の図書室のつどいでは、創作と農業の両立を図ろうと思った経緯、仲間とともに農業に取り組みときの悩みや実りを分かち合う喜び、天候や野生動物との格闘、二拠点生活で得られることなどをお話していただきます。高橋さんのお話を通して新しい農のかたちや、生き方の多様性について考える機会にしたいと思います。

〈高橋さんの本〉表題作、『その農地、私が買います』(ミシマ社)、『ぐるり』、『一生のお願い』(筑摩書房)、詩画集『今夜凶暴だからわたし』(ちいさいミシマ社)、絵本『あしたのきらいなうさぎ』(マイクロマガジン社) ほか

とき 4月5日(土) 昼2時〜4時

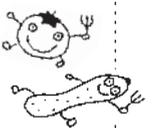
ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 3月12日(水)朝9時〜

電話またはホームページより申込

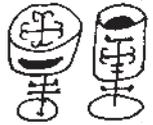
公民館 ☎04225725141



図書室のしらす

『酔わせる映画』

〜お酒と食から映画を読み解く〜



お話 月永 理絵 (映画ライター、編集者)

映画を観ていると、言いようもなく印象的なお酒や食べ物に出会うことがあります。西部劇で登場するビール、楽しく呑み交わされる日本酒、差し出される真っ赤なりんご……。深く考えてみると何かを表しているような気がしませんか。

今回は、映画に登場するお酒と食べ物、食べ物の中でも古くから象徴的に扱われてきたりんごの表象について、西部劇や小津安二郎監督作品、世界各国の様々な映画を紹介していただきながら学びます。お話は、個人冊子『映画酒場』や雑誌『映画横丁』の発行、編集を手掛け、様々な媒体で映画評やコラムを執筆されている月永理絵さんです。数々の作品に潜むメッセージが、お酒と食を通して見えてくるはずですよ。

〈月永さんの本〉『酔わせる映画 ヴァカンスの朝はシールドで始まる』(春陽堂書店)

とき 3月29日(土) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 3月7日(金)朝9時〜

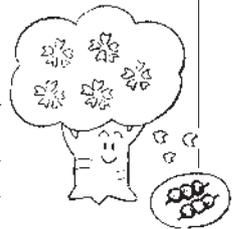
電話またはホームページより申込
公民館 ☎042(572)5141



〈私の本棚から 第6回〉

勝木俊雄 著

『桜の科学』



黒川 祐子

「梅は咲いたか桜はまだかいな」ー春が近づくと母が口ずさんでいた小唄。開花予想がニュースになり、各地で心待ちにされる桜は昔から人々を魅了してきました。平安時代、在原業平も「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」と詠みました。が、業平が見ていたのはヤマザクラ。東国武士が鎌倉で見たオオシマザクラ。苗代桜、種蒔桜とよばれ農作業の目安として100年、200年、田畑の傍らにあった一本桜。やがて千年桜へ齢を重ね巨樹となったエドヒガンも。

しかし、今、多くの人が思い浮かべる「桜」は染井吉野でしょう。染井吉野が生まれたのは江戸時代末。エドヒガン×オオシマザクラの雑種で接木などクローン増殖を行うので大量生産でき、一斉に華やかに咲き揃う姿が好まれ、1950年前後に全国に広まったことが知られています。

そんな桜にまつわるあれこれを『桜の科学』の著者、樹木学・植物分類学・森林生態学の専門家が文化学的な面からも考察します。例えば、桜切る馬鹿、染井吉野短命説に対し、専門家の視点から適切な管理の必要性を訴えます。青森・弘前公園の染井吉野のように130年越えも目指せそうです。また、温暖化について、冬の低温刺激が不足すると鹿児島のように開花が遅れるようになり、さらに花が咲くた

イミシングが揃わない(満開にならない)ことも起こり得るといふ気懸りな話も。各地の開花宣言に用いられる染井吉野が全て同じクローンであることから、比較調査しやすいかもしれません。

ところで、2018年、およそ100年ぶりの野生種の桜発見のニュースを覚えていらっしゃいますか? 紀伊半島南部に自生していたクマノザクラ。この本の著者が発見者です。科学者らしく「個人的な主観」としつつもクマノザクラの魅力を述べ、染井吉野が育ちにくい温暖な地域の美しい桜への期待が増します。

一方で100年ほど前の「荒川堤の桜」の話も興味深い。園芸が流行した江戸時代の栽培品種、関山など今も人気の八重咲きの桜も含め保存・管理・記録したもので、現在、国立遺伝学研究所や多摩森林科学園が引き継いでいるそうです。

この春、多摩森林科学園サクラ保存林でお好みの桜を見つけてみませんか? 江戸時代の栽培品種はもちろん、野生種など1500本以上あり、染井吉野のような集団の美ではありませんが、早咲き、遅咲き、種類も多様な桜が楽しめると思います。

(サイエンス・アイ新書) この本と一緒に読んだのは、『さくら』(写真・野呂希一、解説・浅利政俊) 青葉社

係から

黒川さんの「私の本棚」は今回が最終回です。毎回その月に合わせて選んだ本を丁寧に紹介いただき、ありがとうございます。

